

強者の欲望、弱者の願望

長縄光男

ヘーゲルが近代社会を「欲望の体系」と呼んだのは、「欲望」こそがこの社会の本質を為す「資本主義」の原動力だと見破ったからだ。しかし、「欲望」が歴史や社会の原動力であったのは、何も近代に限られたことではない。そこを敢えて近代社会を「欲望の体系」と呼んだのは、封建社会の身分秩序の下で数世紀にわたり鬱積していた人々の「欲望」が、今度は「国民国家」の枠組みによって整備され、あらゆる方面に向かって、「自由に」、そして、大々の規模で、つまりは「体系」的に発揮されたからに他ならない。現代のナショナリズムが多くの場合、強国の「欲望」から自身の存立を護ろうという、弱い国家あるいは地域の受け身の「願望」に発しているのに対して、近代初期のナショナリズムは列強への道を驀進する能動的な「欲望」に根差していたのである。

だが、近代の「欲望」は歴史を切り開いてきただけでなく、各所で歴史を切り裂いてもきた。アフリカや中南米、そして中東など、近代において後進的地域であることを運命づけられた国々の直線を為す国境は、切り裂かれた歴史の爪痕を象徴的に示している。この歴史の裂け目からは、あたかも大地の裂け目からマグマが噴き出すように、今なお血が噴出し続けている。「ウクライナ」もまた、国境こそ直線ではないが、そのような地域の一つに他ならない。

本誌の編集氏から「欲望」というテーマを与えられた時、私が真っ先にこの国のことを思い浮かべたのは、ロシア学に連なる者として、かねてより、この国の正視するに堪えられない悲惨な現状に心を痛めていたからだ。

そもそも、「ウクライナ」と呼ばれるこの地域は果たして「国」と呼んでいいものかどうか、それすらも疑問視されるほど、幾世紀にもわたり周辺の強国によって収奪され、蹂躪され、「国家」と呼ぶような政治態を形成したことがなかったのだが、それが曲がりなりにも「国家」として独立を果たしたのは1917年、帝政ロシアが崩壊し、「ソヴィエト社会主義共和国連邦」の一つとして国際的に承認された時が初めてであった。だが、それはモスクワによって政治的にも、経済的にも、そして何よりもイデオロギー的に緊縛された「擬制的国家」に過ぎなかった。だから、ソ連邦が崩壊してこれまで「ウクライナ」を国家として存立せしめてきた枠組みがなくなった時、「ウクライナ」を待っていたのは「国家」としての方向性の喪失であった。そして新たな統合の根拠を探る過程で歴史の糸が手繰られはしたが、それは錯綜した複雑極まりないものであった。

ロシアの大平原に「キエフ・ルーシ」と呼ばれる公国の連合体的国家が生まれたのは9～10世紀ごろのこと、それがモンゴルの侵入によって南北に分断された13世紀の半ば以降、北のルーシと南のルーシは別の歴史を歩み始める。

北のルーシは15世紀に至りモンゴルの頸木を脱して、「モスクワ大公国」として自立を

果たすことになるが、これに対して南のルーシの運命は過酷であった。ある時はリトアニア大公国の版図の中に、またある時はポーランド王国の版図の中に組み入れられ、「大公国」と「王国」とが合体して連合国家が出来上がると、今度はこの国家の一部にされた。ここは元来が黒土とよばれる肥沃な土地であっただけに、強国の領土的な欲望の対象となることを免れられなかったのである。かくして、民は独立的な地位を失って農奴的境遇に貶められ、収奪をほしいままにされることになる。「辺境」を意味する「ウクライナ」という、多分に侮蔑を込めた呼称が生まれたのもこの過程においてであった。

他方、「北のルーシ」なるモスクワ大公国の勢力は拡張し続け、16世紀にはシベリアの征服を果たし、「ツァーリズム」と呼ばれる専制的国家への道を着実に歩み続け、18世紀になると「ロシア帝国」と称する北方の巨人へと変貌を遂げる。

この間、ウクライナの人々はコサックを中心としてポーランドの圧政に抗して立ったことがある(1648年)。だが皮肉なことに、この時「ルーシ」という「同族」のよしみを頼ってロシアに助勢を乞うたことが、ウクライナのその後の歴史をより過酷なものにすることになってしまう。すなわち、モスクワは、一方でウクライナの民に加勢すると見せかけながら、他方でポーランドと和約を結び、豊穡の地ウクライナをドニエプル河の東西に分割して山分けしてしまったのである(「アンドルソヴォ和約」1667年)。帝国への道を驀進しつつあったロシアは、もはや昔の「ルーシ」ではなくなっていたのである。かくして、これまで曲がりなりにも一つであった「ウクライナ」は、爾来、ドニエプル河を挟んで東西に分断され、西岸のウクライナはカトリック圏に、東岸のウクライナはギリシャ(ロシア)正教圏にと、異なった文化圏に分属させられることになってしまったのである。

大地を耕すウクライナの民の願望は「一つのウクライナ」を回復することであったが、現実とは別の方向へと更に進む。18世紀、ロシアが帝国となってヨーロッパの列強の一角を占めるに至りつつあった頃、ポーランド王国は衰退の一途をたどり、ついにこの世紀の半ば以降、ポーランドはロシア帝国とオーストリア帝国とプロイセン王国によって分割されてしまうのである(1772年、1793年、1795年)。これに伴い、ウクライナもまたロシアとオーストリアとによって分割統治されることになった。アンドルソヴォ和約から数えて100年、ドニエプル河を境に分断されたウクライナの二つの民の隔絶は、その後の歴史の中でいよいよ拡大することになるのであった。

更に悲しいのは、分断されたのは地表だけではなく、民そのものが内的に分断されたということだ。「分断支配」は異民族(異種族)支配の常套手段だが、この場合も例外ではなく、民の一部(少数の知識人)は次から次へと変わる宗主国の支配階層へと登用されて、ある者たちはポーランド化し、ある者たちはロシア化し、またある者たちはドイツ化することによって、ウクライナの民そのものの中に支配と被支配という関係が生まれてしまったのである。かくして、「ウクライナの民」としてのアイデンティティーはいよいよ希薄化して行かざるを得なくなった。

そんなウクライナが帝政の崩壊後に、どうして一つの国家を形成しえたのか。それを可能にしたのは「諸民族の独立」という社会主義の「建前」に基づくモスクワの、よく言えば指導、有体にいえば強権であったが、背後のあったのは、世界でも指折りの肥沃な大地を「社会主義共同体」の中に確保しておきたいという、モスクワの思惑であった。現に、以後、世界有数の穀倉地帯ウクライナはソヴィエト社会主義の（はっきり言ってしまえば「ロシア」の）「工業化」の経済的下支えとして機能することを求められ、自らの産物を自ら処理する権能を奪われたウクライナの民は、あろうことか、自身が飢餓に苦しみ、時として大量の餓死者を出すことすら一再ならずあったのである。つまり、ウクライナ社会主義共和国とは、もともと傀儡国家としてしかありえなかったのだ。

1991年12月にソ連邦が解体した時、ほかならぬそのウクライナが他の構成共和国に先駆けて、いち早く連邦からの離脱を宣言する。だが、それは「独立」とはおよそ縁遠い、より悲惨な現実を産み出したただけだった。ウクライナはその自然の恵みの豊かさの故に、またしても強者の欲望によって切り裂かれてしまうのである。

社会主義の崩壊後、各共和国に広く現出したのは国有財産の私物化という事態であったが、その先頭に立ったのが「ノメンクラトゥーラ」と呼ばれる共産党の幹部であったことは、今では知らない者はいない。彼らの多くはこのようにして手に入れた財を原資として、資本主義まがいの「新しい」社会の支配者へと変身する。時として「赤いマフィア」とも、「オリガルキ」とも呼ばれるような輩がこれだ。「オルガルキ」の元の意味は「寡頭政治」のことだが、実際に意味しているのは、少数の富裕者のこと。ソヴィエト崩壊後のウクライナでも、その政治と経済を牛耳ったのは、まさに、こうした連中に他ならなかった。

国家の統制という籠の外れた剥き出しの利権に、西欧の資本主義が群がらないはずはない。先ずはEUが分け前に与かろうと駆けつける。アメリカ（の「ネオコン」）は「分け前」どころか利権を根こそぎ持ち去ろうと、大西洋を越えてはるばると馳せ参ずる。他方、ロシアの「赤いマフィア」も黙ってはいるわけがない。何と云っても、これまでの歴史的経緯からして、ロシアにはEUやアメリカ以上に、ウクライナに関心を持ってよい謂われがあるのだから。つまり、EUやアメリカと「ネオコン」と「赤いマフィア」の利権争い—これが今日の「ウクライナ危機」なるものの本質な構図なのではあるまいか。

では、肝心の土地に生きるウクライナの民の願いは奈辺にあるのか。単純素朴に言えば、「一つのウクライナとして仲良く、平和に暮らしたい」ということに尽きるだろう。だが、そもそも人々の心を「一つ」にする絆はどこにあるのだろう。大きく見れば、ドニエプルの両岸の民は、あまりにも長い間、あまりにも異なる道を歩いて来た。そして、その間に、「南のルーシ」の記憶が両岸の民を統合するための文化的基盤となるには、あまりにも多くの異質な因子を互いの内に抱え込んでしまっているのだ。

か弱き民草の切なる「願望」は、一体、いつになったら叶えられるのだろうか。

（ながなわ・みつお、横浜国立大学名誉教授、ロシア思想史・日露文化交流史）

『世界思想』42号、2015年春（世界思想社）1～4ページに掲載したエッセー